2012年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　14：50～15：50　60分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（45点）

もし、人体研究を医学というならば、それは科学である。すなわち、人体にかんする一種の生物学である。しかし、それは「疾患に関係しているところを特に詳しく調べる人体生物学である」という付記を加えても、医学であろうか。それは「医学的生物学」medical biology である。

では、何が足りないのであろうか。犯罪学者でもあるエランベルジェは、犯罪学と医学が科学でない理由として、疾患の研究、犯罪の研究からは「疾患は治療するべきであり、犯罪は防止するべきであるということが理論的に出てこない」ことを強調している。すなわち、彼によれば、犯罪学と医学は「科学プラス倫理」であって、これを総合科学と呼ぼうとテイショウ(1)している――「科学」という言葉を使っているではないかといわれそうだが、欧米語のサイエンスはラテン語の scientia に発して「知」ということである。「総合知」と訳したほうがよかったであろう。ちなみに「科学」は日本最初の「哲学者」西周（にしあまね）の造語で「科」は「分科」ではなく「法則」の意味である。「法則の定立を目指す学」ということだ。

この指摘(2)は確かに一つのポイントである。では、倫理と科学といずれが優先するであろうか。科学的であっても反倫理的であれば医学ではない。逆に、治療を目的とするものであれば、現に用いられているように経験論的医学たとえば中医学であってもよい。難治褥瘡（じゅくそう）や歯周病の治療にはしばしば健康食品プロポリスが有効である。こういう裾野（すそのの）を含めて、医学とはまず倫理的なものである。

しかし、それでは不十分であると私は考える。少なくとも、もう一点で、医学は科学と相違する。それは、囲碁や将棋が数学化できるかどうかという問題と本質的に同じである。囲碁や将棋は数学化できない。それは、科学とちがって徹底的に対象化することのできない「相手」があるからである。「対象」でなく「相手」である。わかりやすいために、(3)サツバツな話だが戦争術を考えてみるとよい。実験的法則科学はいつも成立しなければならないが、「必ず勝てる」軍事学はない。もしできれば、人間に理性がある限り、戦争は起こらない。それでも起これば、それは心理学か犯罪学という「総合知」の対象である。経済学でも

よい。インフレやデフレなどの経済学的不都合を絶対にコクフクする学ではなく、その確実な予測の学でさえない。これらが向かい合うものは「相手」である。科学は向かい合うものを徹底的に対象化する。そしてほとんどつねに成り立つ「再現性のある」定式の集合である。対象化と再現性は表裏一体である。すなわち、「相手」が予想外の動きをしては困るのである。ところが、囲碁や将棋や戦争術は相手の予想外に出ようとする主体間の術である。なるほど、経済学は、常に最大利益を得ようとして行動する「経済人（ホモ・エコノミクス）」というものを仮定しているが、これは人工的な対象化であって、経済学が経済の実態の予測を困難にしている一因である。それは、経済学の対象すなわち経済行動を行う人間の持つ、利益追求の欲望以外の心理学的要素の大きさを重々自覚しながら、これを数理化できないために排除しているからである。つまり、科学的であろうとする努力が経済学をかえって現実から遠ざけてきた。現在、むき出しの「市場原理」が復権をとげている。「市場原理」ならばローマ時代、いや太古からあった。

医学も何かを相手に将棋を指している。その相手は何であろうか。ある人は「病い」といい、ある人はそれは抽象概念の実体化であって相手は「病める人間」であるという。「生物学的・心理学的・社会学的人間」だともいう。「人間の集団」だと疫学はいうであろう。「実存的なもの」も排除できない。実に、医学は「相手は何か」と問いつめられると困るものではないだろうか。医学には他の「学問・技術」にはない、混沌・未分化的なものがある。いずれにせよ相手は複雑な系であり、たえず予想を裏切るように動いている。

その相手が将棋と違うのは、治療者と対等で同質な [(7)] ではない点である。しかし、一方だけを [(7)] として、相手を徹底的に対象化することができない点は同じである。相手を固定すなわち対象化しようとしては裏切られるような力動的関係にあるというべきか。それは戦争術に似ている。この力動的関係の混沌・未分化性は、その「未発達性」のためではないと私は考える。すなわち、人間が人間を相手としているからである。医学においては相手を生かすために、戦争術においては相手の立場を失わせるために——。メスをふるう外科医は自身も創傷や腫瘍を持つ可能性を抱えている。痛みうる人間が医学、精神医学をやり、犯罪を犯しうる人間が犯罪学をやる。こういう対象化しえないものを相手とする学があることは確かである。それ

は近似的な、おおむねこうすればおおむね成功するであろうという「定石」から始まるが、意外にも「捨て石」が死活問題を解決したりして、有限時間内には完全に言語あるいは数式化できないものである。つまり、時には何が正しいかを言えなくとも、ある時間の範囲に何ごとかをしなければならない場合がある。すなわち、直観や熟練(スキル)を必要とする。最後には言語化が不可能に近いものをも含む。医学はなぜ独学で学べないかをよく考えてみよう。

科学は、この不確定部分を最小にしようとする。それが医学の科学的部分である。最小化しようとするのは、しかし、科学の専売ではない。経験、熟練、直観も、不確定性を最小にしようとする。飛行機の(8)ソウジュウ術や航海術と同じである。

では、ありとあらゆる場合を予想して方策を立てれば、医学はついに科学となるであろうか。すでにチェスはコンピュータがしばしば名人を負かしているではないか。この場合、チェスをするコンピュータは科学によって作られたものだが、科学を離れて、「相手」のある領域に入り込んでいるのである。実際、負けたり勝ったりするではないか。

いや、コンピュータをもっと進歩させれば、チェスで必ず勝つであろう、いや今は勝てない碁や将棋でも必ず勝てるであろうという議論があるかもしれない。これは科学の勝利である――と。それは科学の勝利ではあるが、科学になったのではない。そういうコンピュータができて、それが普及すれば、そのゲームは魅力を失い、やがて消滅するであろう。つまり、問題そのものがなくなってしまう。その前にコンピュータ同士を闘わせるかもしれないが、これはコンピュータ設計者同士の闘いであり、ローマ人が猛獣あるいは剣士を闘わせて見物していたのと少し違う。

将棋や碁と違って、医学でも戦争術でも、完全なデータを得ることはできない。一般に、データを得るためには対象を多少なりとも破壊しなければならないからである。また、データは必ず時遅れである。不完全なデータから [(9)] して事態を先取りしなければならない。そして、医学という実践は、相当に安定した部分をも含むけれども、それでも特異体質などに裏切られることになる。状況に応じて変化するスキルをも含む。目標、いや目標を越えた(10)タイキョク観に関するスキルも必要である。先端的な部分では、職人的なスキルと戦略家のような決断の比重が大きくなる。たとえば、微細な血管が入り組んでいる部分の手術である。ここでは技術(テクニック)と戦術(タクティクス)と戦略(ストラテジー)のヒエラルキーが確実に術者の中で動いていることが必要である。

このようなタイプの「相手」と向き合うものを科学や人間以外のものを「相手」とする術と区別して何と呼ぶのがよいであろうか。私には成案がないが、仮に「実践知」としておこう。それは生の現実と相渉るものである。

その有力な方法であるスキルについて一言しておこう。スキルは、言語によって伝達できない部分を含む。理論的には言語化できるかもしれないが、具体的に異星人に鉛筆の削り方を教える場合を考えてみればよい。鉛筆をみたことのない者に対する「鉛筆の削り方マニュアル」を作成すれば何ページになるであろうか。どの筋肉の次にどの筋肉をどれだけどの方向に動かすとかを書いてゆくことを考えてみよう。しかし、眼の前で削ってみせればあっという間に伝達できる。これを行動による伝達としよう。最近の医学教育には、鉛筆を削るマニュアルを、鉛筆を削ってみせることよりも何か正しいこと、新しいことのように考えるきらいがある。その傾向は現場を知らずに育った医学教育者に特にみられる。スキルにはそういう [(11)] 的にしか伝達しえないものがある。

（中井久夫『徴候・記憶・外傷』による）

注　エランベルジェ……二十世紀の精神科医、犯罪学者、歴史学者。　中医学……漢方や鍼灸などの中国の伝統医学。

〔問一〕　傍線(1)(3)(4)(8)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(2)「この指摘」とはどのような指摘か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　犯罪学や医学の研究は科学とは異なり、必ずしも犯罪の防止や病の治療を目的とするとは限らないという、エランベルジェの指摘。

B　エランベルジェが犯罪学や医学に与えた呼称である「総合科学」は、むしろ「総合知」と訳した方が適切であっただろうという指摘。

C　エランベルジェがそうであるように、犯罪学者や医者は、単に優れた科学者であるだけでなく、高いモラルを兼ね備えていなければならないという指摘。

D　科学とはもともと「法則の定立を目指す学」であるから、法則に還元できない複雑な犯罪や疾患の研究は科学とは異なるという指摘。

E　犯罪学や医学は、科学的研究の側面を持ちながらも、社会道徳や人道に適(かな)った目的のためになされなければならない点で、科学とは異なるという指摘。

〔問三〕 傍線(5)「科学的であろうとする努力が経済学をかえって現実から遠ざけてきた」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 経済学は、経済活動を行う人間の複雑な心理学的要素まで科学的に解明しようと努力したが、現実には到底数理化することはできないので、かえって不完全な科学にとどまる結果となった。

B 経済学は、予想外の行動をとる人間の経済行動を数理化することばかりにとらわれて、その一方で、現実に起こっているインフレやデフレなどの経済的不都合に対処することを怠るようになった。

C 経済学は、インフレやデフレなどの経済的不都合を科学的に解明しようと試みたが、その際、現実には、利益追求の欲望以外の心理学的要素がいかに経済行動に影響しているかを過小評価した。

D 経済学は、数理化できないものはあえて対象としなかったために、利益追求の欲求だけに従って行動する「経済人」という現実には存在しないような架空の対象を相手とする事態となった。

E 経済学は、人間は利益追求の欲求に従って行動するという理論に基づいているので、その結果、太古から存在するとはいえ現実には機能しない「市場原理」を復活させた。

〔問四〕 傍線(6)「医学も何かを相手に将棋を指している」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 医学においても医者や医学研究者は、「病い」という抽象的な相手を打ち負かそうとしている。

B 医学においても医者や医学研究者は、同じ人間として患者と対等に向き合っている。

C 医学においても医者や医学研究者は、科学的に対象化しきれないものを相手にしている。

D 医学においても医者や医学研究者は、予想を裏切るようなものを排除しようとしている。

E 医学においても医者や医学研究者は、現在予測できないものも予測しようと試みている。

〔問五〕 空欄(7)(9)(11)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

(7) A 主体　B 客体　C 実体　D 人間　E 対象

(9) A 飛躍　B 熟考　C 推論　D 即断　E 復元

(11) A 感覚　B 実践　C 直観　D 身体　E 視覚

〔問六〕 次のア～エのうち、筆者の考えと合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア その研究がどんなに優れたものであり科学の発展に貢献するものであっても、結果として治療に役立たなければ医学とはいえない。

イ 医学は人間を相手にしているがゆえに、患者の特異体質のような予想外のケースが生じることは避けられない。しかし、医学はこうした特殊なケースに関してもできるだけデータを集積し、可能な限り法則化を試みている。

ウ 囲碁や将棋は、もし相手の作戦や勝敗が常に予想できるのであれば成立しない。つまり、科学になりえないことこそがゲームの成立条件だといえる。

エ 医療の現場ではしばしば、限られた時間内で治療方法を決断しなければならない。その際には、一般的に有効とされている治療方法より、熟練や直観によって得られた治療方法の方がかえって功を奏することがある。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（25点）

音楽でも絵画でも詩でも映画でも、およそ或る「作品」を前にした享受者のとりうる態度として、その「作品」のすでに完成されてある現在の姿を静的な構造体として考察する場合と、それが徐々に形を成していった創造行為の現場をあたうかぎり現実的に追体験しようと努める場合の二つがありえよう。美学・美術史・音楽史といった既成の芸術研究のディシプリンがしばしば陥りがちであった弊の一つは、「作品」をもうすでに凝固しきった既存の所与と見なし、そこに静的な分析ツールや概念格子をあてがうだけで事足れりとしてきたという点だろう。そこからすっぽり抜け落ちているのは、行為の時空に注がれるまなざしである。あくまで行為の現場に執着し、「作品」をその生成と運動のさなかで捉えようとするとき、「作品」はわれわれの前に、冷えきった因習的アカデミズムの言説からはみ出した新鮮な姿で立ち現われ、思いがけない刺激を波及させてくれはしまいか。以下、達成された結果ではなく進行中のプロセスに視線を注ぎたいというわれわれの欲望がいかなる射程と可能性を持ち、いかなる展望を開きうるか、またそれがいかなる限界によって画されているか、等々といった問いをめぐって、暫定的な考察を試みてみたい。

ところで、(1)結果の現前と過程の進行とを隔てるものは、本質的には時間意識の有無である。あらゆる表象作用は行為であり、行為であるかぎりにおいてそれは時間のうちに囚われている。具体的に言えば、詩人が或る言葉を書きつけてから次の言葉を書きつけるまで、作曲家が五線譜に或る音符を置いてから次の音符を置くまでには、いかに微小であれ何がしかの時間が流れないわけにはいかない。絵画や彫刻のように、その全体が享受者のまなざしの前に一挙に現前している空間的な「作品」の場合ですら、創造の現場においては、画家が一つの筆触をカンヴァスに置いた瞬間とまた別の筆触を置いた瞬間との間に、それがいかに短かろうと或る時間が経過しないわけにはいかないのであり、それら時間経過の積分化された総体が作者の労働量を表わし、また場合によっては(2)それがそのまま「作品」の交換価値を表象するパラメーターの一つになることもありうるわけだ。

ただし、そのように数量化された単位時間の集積が、行為の現場で体験される時間とまったく別のものであることは言うまで

もない。作り手の作業が単に既成の手順に従い、そこからはみ出すことなく進行する場合、時間の流れかたのすべてはあらかじめ予見可能なものとなる。ここまでが何分、何時間、さらにあそこまでが何時間、何日、だから全体が仕上がるのは何日後、ないし何週間後、ないし何か月後、というあらかじめの見積もりが可能になり、その予定表に寄り添って均質な物理時間が流れてゆく。言うまでもあるまいが、こうした「計画可能性」の時空には、どれほど多くの労働量が投入され、どれほどの長年月が費やされようと、創造的なものは何もない。「創造」を、ここではベルクソンに従って、新しい「質」を出現させる行為と理解しておくことにする。決まりきった手順で「量」が集積されてゆくかぎりは、それに対応する割合でやはり同様に「量」としての計測可能な時間が経過してゆくばかりだ。それに対して、新たな未知の「質」の出現という出来事の場合、たとえその出来事もまた時間の内部に囚われているのは疑いようもないにせよ、その時間とは均質化された単位時間の集積のことでは決してない。それは拠りどころにすべき基準のないまま下される盲目的な決断の時間であり、前方の着地点に何が待っているのか知らぬまま、いやそもそも、踏みしめられる地面がそこにあるのかどうかさえわからぬまま踏みきられる跳躍の時間である。今ここにあることと、今しも今になろうとしているものの到来との間に介在する、決して数量化されえない宙吊り状態の持続と反復こそが、創造の時間なのである。

この創造の時間に身を寄り添わせつつ「作品」を体験しようとするまなざしの前に、[3]「作品」は確率論的な揺れの相貌の下に現われてくるだろう。行為の時間の内部に身を置くとは、たとえば、この画布のこの箇所にこの色の染みが置かれているのは単に偶然の所産でしかなく、そこにまったく別の色が置かれることも十分にありえたと考えてみることだ。「ありうること」の蓋然性に置き直されるとき、「作品」の決定論的輪郭は一挙に溶解する。なるほど、結果的に置かれたのはあくまでその色であって別の色ではなかったわけで、今やわれわれの眼には、その色を含めたすべての細部はその「作品」がその「作品」となるために緊密に協力し合っており、何もかもが然るべき場所に揺るぎなく位置しているかのように見えるのは事実だ。今になってみれば、ほかでもないその箇所にほかでもないその色が塗られたこと、それが、その絵画作品の創造にとっての唯一にして必然的な選択であったとしか思えない。だが、「今になってみれば」というその「今」とは、研究者の視点が位置する無時間的なメタ・

レヴェルのトポスであり、創造の現場における [(4)] としての「今」とはまったく別のものである。創造の「今」とは、画家なら画家が或る色と別の色との間で逡巡し、決断を下した「行為の今」のことである。それは、計測も数値化もされえない或る持続であり、それを支配するのは確率論的な揺らぎ以外のものではない。

「行為の今」からこの揺らぎの部分を切り捨て、創造行為を必然性の過程として遡及的に記述するのは或る意味では容易なことであるが、アカデミズムの権威に自足するおおかたの研究者の関心事は結局それに尽きているとも言える。その絵の運んでいる主題やメッセージが、画家の人生体験や嗜好や欲望やオブセッションが、様式なり慣習なり規範なりといった共同化された歴史的コードが、さもなくばまた、その絵の美的価値を決定している内在的な構造が、その色がそこにあることを否応なしに命令しているということになるわけだ。もちろん、「作品」の必然性をめぐるそうした様々な説明の仕方のどれもこれもが牽強付会の強弁であるわけではなく、その整合性と首尾一貫性の多寡によって説明の説得力は増減し、またその割合に応じて学問的な貢献度が測られることになったりもするのだが、いずれにせよそれは「作品」を輪郭の定まった静的な構造体として捉える立場であることに変わりない。そのとき、創造行為は決定論的な世界像と矛盾なく調和し合い、(5)「作品」に対する研究者の働きかけとは、単にその調和ぶりの諸相をなぞり上げてゆくという身振りの域を出ることがない。

（松浦寿輝『官能の哲学』による）

注　ディシプリン……学問的な訓練　　パラメーター……変数　　オブセッション……強迫観念

〔問一〕 傍線(1)「結果の現前と過程の進行とを隔てるものは、本質的には時間意識の有無である」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 完成した作品と進行途中の作品の違いは、作者が創作にどのくらい創造的な時間を費やしたかによる。

B 完成した作品が創作過程の積み重ねの結果と言えないのは、創作には創造の時間が関わっていることによる。

C 完成した作品とそれに至る過程が不釣り合いに見えるのは、創造の時間についての理解が足りないことによる。

D 完成した作品にこだわるか、その過程にこだわるかは、作者がそれに要する時間の質をどう考えているかによる。

E 完成した作品に注目するか、その過程に注目するかという態度の違いは、創造の時間に関心を寄せるか否かによる。

〔問二〕 傍線(2)「それがそのまま「作品」の交換価値を表象するパラメーターの一つになる」の具体的な説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 一枚の絵を完成させるのにどれだけ時間を費やしたかが、その絵の評価を決めることになる。

B 一枚の絵を完成させるのにどれだけ創造的な時間を費やしたかが、その絵の質を決めることになる。

C 一枚の絵を完成させるのにどれだけ時間を費やしたかが、その絵の価格を決めることになる。

D 一枚の絵を完成させるのにどれだけ創造的な時間を費やしたかが、その絵の価格を決めることになる。

E 一枚の絵を完成させるのにどれだけ物理的な時間を費やしたかが、その絵の質を決めることになる。

〔問三〕 傍線(3)「「作品」は確率論的な揺れの相貌の下に現われてくる」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 作品は作者が思いつきで作った結果出来上がったものだということがわかってくる。
B 作品は創作中に偶然が重なった結果出来上がったものだということがわかってくる。
C 作品は作者が創作過程で迷った結果出来上がったものだということがわかってくる。
D 作品は作者が蓋然性を計算した結果出来上がったものだということがわかってくる。
E 作品は創作中に最善が選ばれた結果出来上がったものだということがわかってくる。

〔問四〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当な語句を左の中から選び、符号で答えなさい。

A 決断と跳躍の時間　B 持続し反復する時間　C 静的で調和のとれた時間
D 揺らいで逡巡する時間　E 緊密かつ新鮮な時間

〔問五〕 傍線(5)「「作品」に対する研究者の働きかけ」の内容を端的に示している四十五字以上五十字以内の箇所を本文中から抜き出し、その最初と最後の五文字を答えなさい。(句読点、かっこも一字と数える)

〔問六〕 次の文ア～ウのうち、本文の主旨に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　作品を歴史的な視点から捉えるアカデミックな考え方は、出来上がった作品に対する関心が薄いので、作品を魅力あるものとして捉えることが出来ない。

イ　行為の現場を追体験するつもりで作品を享受しようとすれば、作者の試行錯誤の様子が見えてきて、作品の必然性がよりよく理解出来るようになる。

ウ　作者はあらかじめ自分の持っていたイメージ通りに作品を創作するわけではないので、出来上がった作品は整合性や一貫性を持っているとは限らない。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

三日の御鶏合はせに、「今年は女房のも合はせらるべし」と聞きしかば、若き女房たち、心つくしてよき鶏ども尋ねられしに、宮内卿典侍殿は、「為教の中将がはかまといふ鶏を出ださむ」などぞありし。万里小路大納言の参らせられたる、赤鶏のいしさかなるが、毛色も美しきを賜はりて、空局に誇らかして置きたるを、盛有といふ六位が、「その鶏、きと参らせよ」と言ふ。(1)構へて鶏などに合はせらるまじき由、よくよく言ひて参らせつ。とばかりありて、片目はつぶれ、さかより血滴り、尾抜けなどして、見忘るる程になりて帰りたり。大方、思ふはかりなし。「今は(2)ゆゆしき鶏ありとも何かはせむ。賜はりの鶏なれば、聞きもいみじからむとこそ思ひしに」など、返す返す心憂くて、弁、

(3)我ぞまづ音に立つばかりおぼえける木綿付鳥のなれる姿に

三日、御鶏合はせなり。御所も広御所へ出でさせおはします。冷泉大納言・万里小路大納言・左衛門督・三条中納言公親・頭中将公保・伊予中将公忠・資保の中将、蔵人は残りなし。初雪・中赤・小黒などいふ御鶏ども、かねてより伏籠につきて、おのおのあづかりて、丁子・麝香すりつけ、薫物などして、いづれか匂ひ美しきとぞ争ひし。御簾のうちより出だされしかば、万里小路大納言たまはりて合はせられし、ゆゆしかりし聞きなり。ひよひよより御所に御手馴らさせおはしまして、(4)飼ひ立てられしいみじさばかりにてこそ侍れ、御鶏柄はあやしげなれば、(5)勝たせむとてそれより劣りたる鶏どもに合はせられしも[(6)]。公忠・公保が鶏、合はせし折、伊予中将が鶏、空踊りするとて人々笑ひ給ひしに、冷泉大納言、「久方の空踊りこそ[(7)]」とのたまへば、公忠、「さこそ」と言ひたりしを、[(8)]て、弁内侍、

(9)雲居とはなれさへ知るや久方の空踊りする鳥にもあるかな

（『弁内侍日記』による）

注　鶏合はせ……闘鶏。　赤鶏……羽の赤茶色の鶏。　いしさか……石のように堅いときか。
木綿付鳥……鶏の異名。　御所……帝。　丁子・麝香……香料の名。　ひよひよ……ひよこ。
空踊り……飛べないはずの鶏が空しく空中に飛び上がること。

〔問一〕傍線(1)「構へて鶏などに合はせらるまじき」、(2)「ゆゆしき鶏ありとも何かはせむ」、(4)「飼ひ立てられしいみじさ」とはどういう意味か。もっとも適当なものをそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(1)　構へて鶏などに合はせらるまじき

A　わざわざ他の鶏と闘わせない
B　よく気をつけて他の鶏と闘わせる
C　決して他の鶏と闘わせない
D　よく準備をして他の鶏と闘わせる

(2)　ゆゆしき鶏ありとも何かはせむ

A　恐ろしい鶏があっても何の価値があるだろう
B　恐ろしい鶏になってしまってどうしたらいいだろう
C　立派な鶏があると言ってしまったのにどうしたらいいだろう
D　立派な鶏があるとしても何の価値があるだろう

(4)　飼ひ立てられしいみじさ

A　帝にかわいがられることの甚だしさ
B　帝に育てられたというおそれ多さ
C　帝に育てられた鶏の劣っているさま
D　帝に強く育てられたことの素晴らしさ

〔問二〕 傍線(3)「我ぞまづ音に立つばかりおぼえける」という部分には、作者のどのような気持ちが表れているか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 自分の鶏がぼろぼろになったことは、すぐにうわさになるだろうと想像する気持ち。
B 鶏よりもまず自分が声をあげて泣きたい思いだと落胆する気持ち。
C 自分こそが立派な鶏を持っているとうわさになりたかったのにと落胆する気持ち。
D 自分はとにかく盛有のしたことを帝に訴えてやりたいという気持ち。
E 自分は盛有のしたことをずっと根に持って忘れないだろうと思う気持ち。

〔問三〕 傍線(5)「勝たせむとてそれより劣りたる鶏どもに合はせられし」とはどういうことか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 帝の鶏は勝たせなければいけないため、試合の相手としてそれより劣った鶏を探して闘わせた。
B 万里小路大納言は、帝の鶏になら自分の鶏が勝てると思って、帝の鶏と自分の鶏を闘わせた。
C 帝は自分の鶏を勝たせたかったので、弱い鶏と闘わせるようにと万里小路大納言に命じた。
D 帝の鶏は大変立派で強いので、それより劣った鶏としか闘わせることができなかった。
E 帝の鶏は強くなかったので、自分の鶏を勝たせたいと思った人たちが、帝の鶏と闘わせようとした。

〔問四〕 空欄(6)(7)(8)には形容詞「をかし」が入る。もっとも適当な形をそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

A をかしく　B をかしかり　C をかし　D をかしき　E をかしけれ

〔問五〕 左のア～オは、傍線(9)の和歌とその歌が詠まれた背景についての説明である。本文と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 作者は、天皇の御前で鶏を空踊りさせてしまった伊予中将をたしなめる気持ちでこの和歌を詠んだ。

イ 作者は、ここが「雲居」の異名を持つ宮中だから鶏も飛んでみせているのかとユーモアを交えて詠んでいる。

ウ 空踊りする鶏を見て、冷泉大納言はその状況を瞬時に連歌の上の句の形で詠んでみせたのである。

エ 冷泉大納言の語りかけに対し、公忠は気まずい気持ちで「そのようなことをなぜ仰るのですか」と反論をした。

オ この歌の中に用いられている「久方の」という言葉は「空」にかかる枕詞である。

〔問六〕 傍線(9)の和歌にある「なれ」とは誰のことか。もっとも適当なものを左から選び、符号で答えなさい。

A 伊予中将　B 伊予中将が鶏　C 冷泉大納言　D 御所　E 頭中将が鶏